

ばく りゅう
麥粒

2014. Spring

麦粒 / NO. 123

発行・キリスト教センター

チャペル・ブックレット

宗教部では今までの「宗教講演会」のお話をブックレットにまとめ、発行しています。無料でどなたにでも差し上げますので、ご希望の方は、キリスト教センターへどうぞ。チャペルにも置いてあります。

- No.1. 「経済の論理と人間の論理」(塩沢 美代子)
- No.2. 「心を問い続けて」(谷 昌恒)
- No.3. 「国際化時代におけるキリスト教の使命」(徐 洸善)
- No.4. 「激動化する現代史と神のみことば」(池 明観)
- No.5. 「生きることの感動」(金 纓)
- No.6. 「生きるよろこび」(村田 佳寿子)
- No.7. 「心を支えているもの」(山本 将信)
- No.8. 「主の愛この眼にありて」(武岡 洋治)
- No.9. 「日本におけるキリスト教主義大学の使命」(池 明観)
- No.10. 「いのちを支えるホスピスケア」(柏木 哲夫)
- No.11. 「天と地のひびき」(小塩 節)
- No.12. 「絵本のちから」(松居 直)
- No.13. 「ハイジ、クララは歩かなくてはいけないの？
—こどもの物語と聖書に見られるくしょうがい者>差別—」
(荒井 英子)
- No.14. 「お父さん、僕はなに人？ —間 (はざま) から読む聖書—」
(金 永秀)
- No.15. 「人権・生命の尊厳—野宿生活者の現場から—」(松本 普)
- No.16. 「地球に、そして日本に生まれて今ここにいる」(太田 信吉)
- No.17. 「メイク・ア・ウィッシュ〜夢の応援団」(原 順子)

目 次

- 新入生の皆さんへ (2)
- 平和への進化 平井克也 (4)
- 身近な気づきと出会い 西中利也 (7)
- スイカはなぜ甘いか？ 上田幸則 (11)
- イエスの愛の教え 高見伊三男 (15)



新入生の皆さんへ

敬神愛人



(F.C.クライン)

「先生、律法の中で、どの掟が最も重要でしょうか。」
イエスは言われた。「『心を尽くし、精神を尽くし、思いを
尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。』これが最も
重要な第一の掟である。

第二も、これと同じように重要である。「隣人を自分の
ように愛しなさい。」

(新約聖書 マタイによる福音書22章36～39節)

名古屋学院大学に入学された皆さん、ご入学おめでとうございます。
皆さんは自分で選んだにせよ、大学に選ばれたにせよ、とにかくこの大
学の学生となられたのです。皆さんはこの大学について何をご存知で
しょうか。これからいろいろな機会に聞かれたり、読まれたりされるで
しょうが、ここでも少しお話したいと思います。

☆

私立の学校はそれぞれ独自の理念、「建学の精神」を持って建てられ、
またそれを継承して運営されています。わが名古屋学院大学の「建学の
精神」は「敬神愛人」です。これは前述の新約聖書から引用されました。

人間は神を愛し敬うこと、そして自分を愛するように隣人を愛すること、
この「敬神」と「愛人」を一番大切な掟として守らなければならないとい
う、イエス・キリストの教えです。これは、ただ人と仲良くしなさいとい
うヒューマニズムからだけでなく、神を敬うことによって成立する隣
人愛です。これを教育の基本にしているのです。

☆

1883年、アメリカからフレデリック・チャールズ・クライン (F. C.
Klein) という宣教師がキリスト教の伝道と英語学校を目的として来日
しました。そして横浜に英語学校、教会をつくるなど伝道の成果をあ

げ、彼が次の着任地として夫人とともに名古屋に来たのは1887年です。
彼らは名古屋に着いたその日から英語の学校を開いたのです。現在
は名古屋市中区栄のちょっと東に位置します。その「私立愛知英語学
校」は「名古屋英和学校」と改称し、これがわが名古屋学院大学の基とな
りました。

その時、クライン博士がその教育の基本理念として掲げたのが「敬神
愛人」でした。

☆

新入生の皆さん、皆さんはこれから少なくとも四年間はこの大学の学生
として勉強をしていくのです。ここでは勉強ばかりでなく、人間を成長
させていくことにも励んでください。

そして私たちは祈っています。「敬神愛人」が示すように、皆さんが自
分を愛するように他人を愛することができますように、また、人間の力
を過信することなく、それをはるかに超えた存在を認める、謙虚な人間
へと成長を遂げることができますように。

◆ チャペルへの招き ◆

チャペルでは週に二回、それぞれチャペルアワー、カレッジアワーと称
してキリスト教の礼拝の時間を設けております。チャペルに集い、教職
員や近郊の牧師の奨励を聴き、賛美歌を歌います。大学は決して、皆
さんにキリスト教の信仰を持たせようと考えているわけではありません
が、世界の大きな文化の源流の一つともいえるキリスト教に少しでも触
れて、何かを感じていただければと考えております。

<名古屋キャンパス>:チャペルアワー 火曜日12:40～13:10 白鳥学舎チャペル
カレッジアワー 木曜日12:40～13:10 白鳥学舎チャペル

<瀬戸キャンパス>:チャペルアワー 金曜日13:00～13:30 瀬戸学舎チャペル

☆

チャペルは原則としていつでも開いています。静かに落ち着きたいと
きはどうぞお気軽に利用してください。ただし、大声でのおしゃべり、
飲食は禁止です。チャペルの椅子に座り、静かに自分と向き合い、語り
かけ、そして内なる声に耳を傾けると、新しい導きをそこに見出した
り、また何か発見があるかもしれません。また、チャペルではオルガンア
ワーや宗教講演会、コンサートなど様々な行事や勉強会などを行って
います。

平和への進化

平井克也

主は国々の争いを裁き、多くの民を戒められる。
彼らは剣を打ち直して鋤とし
槍を打ち直して鎌とする。
国は国に向かって剣を上げず
もはや戦うことを学ばない。

(旧約聖書 イザヤ書2章4節)

ワニという生き物は爬虫類の一種で大きなものとなると10メートルにも達する動物であります。以前このワニについて少々興味深い話を聞きました。ワニというと水辺で獲物を待っていて、近づいてくる獲物に噛み付き、引きずり込んで食べてしまう危険極まりない動物という印象があります。ワニはあまり識別能力や判断能力が発達していない動物らしく、同じ種類のワニのこどもであっても見境なしに反射的に噛み殺してしまうことがあるのです。こうしたワニの行動、すなわち近づくものに反射的に噛み付くという行動はそもそもワニの脳の構造に原因があるというのです。つまりワニの脳は他の生き物に攻撃する方の仕組みが発達しているわりに、攻撃を抑える方の仕組みが十分備わっていないのです。実は私たち人間の脳の中の古い層、すなわちより原始的な部分にはワニの脳と同じものが残っていると

いう事実が科学的に確認されています。

人間の場合その後の長い進化の過程でワニの脳とは異なる新しい脳の層、大脳というものを非常に発達させてきました。そしてこの新しく発達した部分には、とりあえず理性と言ってもいいと思いますが、そうした働きをするものが含まれているというのです。実際何か不愉快なことがあって相手を殴ってやりたい、蹴っ飛ばしてやりたいと思っても、たいていの人は直ちにそんな行動に出ません。堪忍袋の緒が切れるという表現がありますが、そういう最後の紐がプツンといくまでは普通は我慢をしたり気分転換をしたりと色々な対応をするものであります。そうしたとき私たちの中では、ワニの脳と理性が争う葛藤の状態が生じていると言えるのかもしれませんが。私たちは生活の中でこうした葛藤をしばしば経験しますが、このような心の

綱引きにおいて必ずしも理性が勝つとは限らないのです。時としてワニの脳が勝つということが起こるのです。先祖がえりという言葉がありますが、要するに人間はワニ的な攻撃反応を抑える方向に進化してきたといっても、それはワニの脳そのものがなくなったわけではないということです。それどころかこうしたワニの脳がなくなることがないのであって、私たちはこの部分を抱えたまま、それと付き合い続けていかなければならないのです。

今日の聖書箇所は終末の時、つまりこの世の完成の時に神様がもたらしてくれる平和を言い表した聖句であります。その時にはもはや剣とか槍という武器を打ち捨てられるのだ、そしてそうした武器から鋤や鎌といった農作業のための道具が生産されるのだというのです。言い換えれば神様の支配は人間同士が争う状態の終わりを意味し、人間が汗を流し働き、労苦と喜びを共にしながら豊かな収穫に預かる世界が実現するのだとそう聖書は言っているのであります。イザヤ書はこうした終末への期待を今から2700年前に語っていたのであります。ところが2700年を経た現代においても実はこの剣と鋤を巡る問題はさほど変化はないのです。それどころか太平洋戦争末期、物資不足に悩んだ日本は武器を製造するために一般家庭の鍋や鎌といったものまで取り上げ、お寺や教会の鐘も取り上げられました。そのイザヤ

の預言とは正反対のことが六十数年ほど前の日本では現実起こっていたわけであります。人間というものはこのようにいざとなれば鋤を剣に変えることを実践する生き物なのです。たとえ余裕があっても剣を鋤に打ち変えるということはなかなか思い至らない面を持っているように思うのです。

さらに考えてみますと戦争のように敵をはっきり定めることや、勝つことを目標に掲げると、多くの人の気持ちをまとめることができるように思います。敵と味方という分け方を超えてみんなが共に働き、共に労苦し、共に喜ぶということとはなかなかまとまらず、すぐに敵味方をわけ、戦争をしてきたわけであります。それは見方を変えれば、ワニの脳に身を委ねるのは簡単だけれども、理性に信頼するのは難しいということの意味しているのかもしれませんが。世界の現実として日々私たちの目に飛び込んでくる戦争、内乱、巨大な暴力の数々というのは、人間が今もってなおワニの脳を克服していない事実を証明しているのであります。暴力と理性、戦争と平和を巡る問題に関して、人間は今なお完全な進化を遂げるに至っていないのです。イザヤの語った剣を鋤に打ち変えるという預言はまだかなっていません。それどころか剣によって生きることができるといふ力の信仰の方がイザヤの時代においても、現代においても主流とさえ言えるような世界が続いて

いるのです。しかしそのようなものはワニでも持ちうる信仰なのだということを私たちは知らなければならないのです。力の信仰ではなく、新しい信仰が必要なのです。

力と力の均衡や、恐怖による平和といったものではなく、そうしたものを抜き出た新しい平和、新しい世界の枠組みへと本当の意味で進化しなければならないことに私たちは直面しているのです。それは決して一部の宗教家や思想家の理想といったようなものではなく、もはやそれが実現しないなら私たち人間の未来そのものが失われてしまうのです。私たちみんなの生き残りをかけた、この上なく現実的な課題であるのです。今日最初に言いましたように自分たちのこどもでさえ嘔み殺してし

(ひらい かつや 日本基督教団刈谷教会牧師 2013.11.10 チャペルアワー奨励)



まうワニのようなあり方をしていれば、私たちは遅かれ早かれ滅びてしまうのであります。私たちの中からワニの脳、力の信仰が完全に消えてしまうことはありません。今日も明日も自分の中にそうしたおぞましい、恐ろしい部分を抱えて生きていることを私たちは常に覚えていかなければならないのです。でも人間がワニと異なるのは、自分がそのようなおぞましさを恐ろしさを抱え持っていることを私たち自身知っているというその一点にあるのです。そのような弱さや愚かさを自覚しながら、共に生きるという生き方に立って一日一日を過ごしていきたいと思えます。

身近な気づきと出会い

西中利也

求めなさい。そうすれば、与えられる。探しなさい。そうすれば、見つかる。門をたたきなさい。そうすれば、開かれる。だれでも、求める者は受け、探す者は見つけ、門をたたく者には開かれる。

(新約聖書 マタイによる福音書7章7～8節)

マタイによる福音書7章7～8節は「求めよ、さらば与えられん。たたけよ、さらば開かれん。」という言葉で一般の人にもよく知られている聖書の言葉です。私は名古屋学院大学を卒業して35年近く経ちました。私が在学中は当然この名古屋キャンパスはまだありませんから、瀬戸キャンパスで4年間学びました。瀬戸キャンパスには六合館(りくごうかん)という場所があります。毎日教室に行くのに、六合館から階段を降りていくわけですが、その4階から3階に降りる踊り場、ここに毛筆で書かれた聖句がいつも掲げてあります。毎月聖句が変わりますが、そこに「求めよ、さらば与えられん」という聖句が年に一回は掲示してありました。私もこう見えても18,9歳の時代があったものですから、まだまだまったくわかっていない状態です。ただじっと待っていれば願いは叶うという意味かなと思ったりもしました。ややもすると“願い続けていれば必ず実現するんですよ”というふうに思

いがちです。色々な説教をお聞きしたところ、これは神に対し自分の願いを前面に出すのではなく、神に関すること、これは御心ですけれど、それを熱心に祈り求めることです、とおっしゃられました。なかなかわかりにくいと思いますが、マタイによる福音書7章11、12節はこのように続いています。

「このように、あなたがたは悪い者でありながらも、自分の子供には良い物を与えることを知っている。まして、あなたがたの天の父は、求める者に良い物をくださるにちがいない。だから、人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい。これこそ律法と預言者である。」

ということで、他者に対する思いやり、行いも最終的には説いているという聖句です。

また違う言葉を一つ言います。セレンディビティという言葉、みなさんお聞きになったことはあるでしょうか？非常に難しい言葉です

ね。私もなかなか覚えようと思って
も一回では覚えられないんですが、
Serendipity,セレンディビティです。

この言葉の起源はイギリスのある
小説家が、こどもの頃に読んだ童話
『セレンディップの3人の王子』を基
にして造りだした造語だそうです。
セレンディップというのは私たちは
小学校でセイロンと習いましたが、
今のスリランカ、紅茶の有名な国で
す。その小説家が使っている意味と
しては“自分が見つけたちょっとした
発見”という意味で使っています。
これを辞書で引きますと、「何かを探
している時、探しているものと別の
価値があるものを見つけ出す能力。」
と書いてあります。英英辞典で調べ
ますと、“the natural ability to make
interesting or variable discoveries
is by accident.”「偶然に見つけたも
のを興味深く、価値のある発見を偶
然に見つける能力」という意味にな
ります。共通しているのは能力、こ
ういったことは能力であるとそうい
うことをいっています。特によく使
われるのは自然科学におけるセレ
ンディビティです。自然科学は実験
を重ね、失敗を繰り返します。失敗
してもそこから気を落とさずに学び
取り、失敗から学び取ることができ
れば、必ず成功に結びつきます。

私が最初にこの言葉を聞いたの
は、ノーベル賞を受賞された田中耕
一さんのお話でした。調べてみます
と古くは電流と電気の関係である
とか、ノーベルによるダイナマイト
の発明であるとか、レントゲンによる

X線の発明ですとか、キュリー夫人
によるラジウムの発見であるとか、
そういったこともこのセレンディビ
ティが見出せる代表例だそうです。
こういった能力、私は非常に重要で
すし、素敵なことだなと思います。学
長とよくお話をします。学長はこの
大学の中で学生たちに気付きの機
会を与えられればということをよく
おっしゃいます。セレンディビティ
というのはまさにこの気付きのこ
とじゃないかと思っています。

先ほどのマタイによる福音書とセ
レンディビティ、まとめて言えば、探
究心と洞察力かな、と思います。マ
タイによる福音書では「待っていて」
だけでは発見はありません。じゃあ
どうすればいいんでしょうか。これ
は色々なところでも言われますが、
自分が何を求めているか、自分が
どうありたいか、自分が将来どう
なりたいか、こういったことをまず
見つめなおすこと、ここから始ま
ります。その次に、行動することだ
と思います。しかし行動といいまし
てもただやみくもに走るだけじゃ
ありません。よくHow to本などで
「走りながら考えなさい」と書い
てありますが、私は考えながら走
るべきじゃないかなと思っています。
やみくもに動き出しても、ただ走
って行って壁にぶつかる、あるいは
何かにつまずきます。行動だけが
先んじていれば、何につまずいた
かを気が付かないです。考えなが
ら走っていればあらかじめぶつ
かる壁、あるいはつまずくもの
というのが想像できます。という

きをやはり「走りながら考える」
のではなく、「考えながら走る」と
いうことが大事なのではないかな
というふうに思っています。

学生時代、今色んな悩みだとか、
嫌なことがあると思います。ただ、
私たちの年代からするとみなさん
の世代が本当に羨ましいです。学生
時代、勉強したくないな、学校行
きたくないなと思ったことはあ
りましたが、今、教室の中でみな
さんが勉強している姿を見ると、
こんなに羨ましいことはありません。
体力、時間、柔軟な精神と頭脳を
たっぷりと備えてきます。今まで
どうあれこうあれ、これからま
だまだ勉強できます。

さきほどいいましたセレンディビ
ティの能力を発揮できるようにこ
れからどうして欲しいかというこ
とを言います。

まず、眼を大きく見開いてくだ
さい、色んなものが見えてくる
と思います。心を開いてください
、感じることが出来ます。耳を
そばだててください、色んなこ
とを聞くことが出来ます。そし
て空気、空気を肌で感じるこ
とと大きく良い空気を吸ってくだ
さい。そういうことが結局は求
めること、門を叩くことに繋が
ってくると思います。

偶然とか必然とか運命とかいう
言葉があります。偶然というのは
何の因果関係もなく予測してい
ないことが起こることかと思
います。この偶然も、動かなければ
、眼を見開いて、耳をそばだて
て、空気を肌で感じていなければ
出会えないと思

います。その対極に必然という
言葉があります。必然というのは
必ずそうなると決まっているこ
とだと思います。この必然もじ
っとしといてはないでしょう。
偶然が重なってその積み重ねで
必然になるということだと思
います。ということは、この必
然も自分で導き出すものじゃな
いかなと思います。そして運命
は生まれた時から決まっている
人の運だといわれていますが、
この運命も偶然と必然の積み
重ねで、結果として人の運命に
なっていく。いいか悪いかとい
うのはその人の努力と神様の導
きではないかなと思います。

なぜこんな話をしたかといいま
すと、ちょうどみなさんはゆとり
世代です。詰め込み教育が批判
され、もっと個性を活かそうと、
ゆとり教育がされてきたわけ
です。ちょうど今、見直しがさ
れているところです。これから
まあ少し変わってくると思
います。先日ある小学校の先生
と、小学校の先生がゆとり教
育をどういうふうに思ったか
というお話をする機会をもち
ました。とにかく授業時間が
短縮されました。準備をす
る時間はあるんだけど、授業
の中で伝えること、教育する
ことをその時間内に収めなけ
ればいけません。そうすると、
教室の中で黒板に書くことが
できなくなりました。プリント
を作って、それを配って授業
をします。そうすると生徒さん
がどういうふうになるかとい
うと、ノートをとらなくなります。
ノートをとるという行為は
それ自体が勉強なんです。書く

こと、考えること、それらをノートをとる行為でやっています。それができなくなりました。プリントをファイルして、あるいはノートに貼って、それで出来上がりです。生徒たちはみんな真面目に聞いています。聞いてはいるけれども、わかったつもりでわかっていない場合が非常に多いということです。そういう人たちが大学に行って、さあ自分たちでカリキュラムを考えて作って勉強しなさいと言ってもなかなか難しいでしょうね。そのまま社会に出たらどうなるかという、メモをとれない、人の言うことも聞いているようで聞いていないね、という社会人になってしまいますよ。ということをおっしゃいました。もちろん全員の方がそうではありません。全部じゃないけれどそういう傾向があります。ただ先ほど申し上げた行動に対する思い、姿勢というものが特に今の時代だから、今のみなさんだから心がけていただきたいなと思います。

決して100%の人、全員が満足な大学生活を送っているはずはありません。もしかしたら、「名古屋学院大学は第四志望ぐらいで、しょうがないけどこしか受からなかったから来たよ。」といった不本意入学や、あるいは「まあ別に目的ないけど大学行かなきゃ親がうるさいから来たよ。」という無目的入学をされた人もみえるでしょう。もしかしたら、「この大学に望んで来たけれども、どうも違うぞ。こんなはずじゃなかったな。」

(にしなか としや 事務局次長 2013.12.19 カレッジアワー奨励)

という人もいるでしょうし、毎日の学生生活に張りがないという人もいます。目標が見つからないという人もかなり多くの比率でいるんじゃないかと思います。まず身近なところから発見ができるように周りをよく見てみましょう。非常に大事なことだと思います。大学の宣伝をするわけではないですが、名古屋学院大学はそういったみなさんが何かを気付く機会というのがたくさんあります。私は宝庫だと思っています。なぜかという、私たちはみなさんに気付いて欲しいから色々な仕掛けをして、組織もつくり、毎日努力をしています。セレンディピティは遠いものではなく、意外に皆さんの近くにあるのです。

最後にもう一度今日の話しを振り返ります。最初に「求めなさい」とありました。「求める」ということはまず「見直しなさい」ということです。「門をたたきなさい。そうすれば、開かれる。」ですが、ただどっかに行っただけではいけませんね。門をたたくと門をあけてくれる人がいます。門をたたいて、そこに色々な人に話しかけてください。必ず教員も職員もみなさんに応えます。話しかけてください。大学時代に得た恩師、知人はもしかしたら一生の師になるかもしれません。ドアをノックしてみましょう。そして、素晴らしい気づきと出会いがあることを願っています。

スイカはなぜ甘いか？

上田幸則

春学期のカレッジアワーでは「敬神愛人」というテーマでお話がなされています。本学の建学の精神「敬神愛人」について新入生の皆さん向けに、私自身の学生時代に感銘を受けた話などを交えながら話をしようと思います。

「敬神愛人」という言葉、どう思いますか？わかりますか？わからないですか？その言葉が難しいと思いますか？それとも簡単だと思いますか？「敬神愛人」という言葉はおそらく基礎セミナーの授業などでも聞いたことがあると思います。その言葉の意味を簡単に私なりにいいますと「神を敬い、人を愛せ」ということです。そんなことぐらい文字を見たら当たり前じゃないか、誰でもわかることじゃないか、と思われる方もいると思います。実際にそういうことですが、そこでもうひとつ踏み込んで考えていくと、では「神を敬い、人を愛せ」とはいったいどういうことだろうという疑問が出てくると思います。そこであらためて皆さんも「敬神愛人」がどういうことなのかを考えていただきたいのです。今まで敬神愛人について学ぶ機会がなかった方も、この機会に大学で学んでほしいと思うのです。

ところがですね、おそらく皆さんは高校までの生活に慣れていると「敬神愛人についてどういうことなのか早く教えてよ」と答えを求めるとい方が多いのではないのでしょうか。実際には大学の学びはそのようなものではありません。結局学ぶということ、この“学ぶ”ということがどういうことかということも踏まえて考えていきたいのですが、私は学ぶということは、自分で答えを見つける力を身につけるといことだと思っております。

私が皆さんと同じ頃、学生時代に受けた授業の中で「生命の科学」という授業があり、先生が次のような言葉を板書されました。それは「スイカはなぜ甘いか？」でした。なぜ甘いかといわれて、答えに詰まってしまった覚えがあります。それなりに自分で考えるのですが、なぜ甘いのだろうか、どう答えたらいいのだろうか、と考えました。皆さんもちょっと考えていただきたいのですが、その答えは簡単でしょうか？難しいでしょうか？もしかしたら考えたこともなかったかもしれませんね。その先生がその問いに対して最初に答を板書されたのは、「糖分が含まれているから」でした。実に明快な答えでした。

正直、私も拍子抜けした覚えがあります。しかし先生は続けて「この授業ではこのような答えは求めていません」と言われました。そしてもう一つ、続けて書かれました。それが何だったかという、「食べてもいらたがっているから」というふうに書かれました。正直驚きました。驚いたと同時にそちらの方が、私は納得したような安心したような気持ちになったのです。さらにその先生は続けて、柿を題材にして説明されました。事実かどうかは私も確認したわけではありませんが、その先生は柿というのはもともと天然には渋柿しか存在しない、と言われました。渋柿しか存在しない柿が、実が熟して落ちる寸前になるとその時に甘くなるそうです。それはなぜかということですが、最初から甘いとそこにカラスが寄ってきてどんどんつついて実を食べてしまう、落ちたときには種だけしか残らず、その周辺には種ばかり残ってしまう、ということで、柿にとって生存競争が激しくなるわけです。一方で、最初からではなく落ちる寸前に甘くなるとどうなるかというと、下に落ちた時にカラスではなく、狸が食べ、狸は柿の実と一緒に種ごと食べ、そして狸はそこら中を歩き回って、肥料と一緒に種を蒔いていくことになります。そのようにして柿は自分の子孫を残していくということに必死になって生きているのだ、と先生は話されました。

そこで、その答えについて、私自

身、感じたことがありました。食べて欲しいからという答えが求められているとはいえ、必ずしもそれが絶対的な正解であるというふうには思えないということです。その答えはそうなんじゃないかということ、自分で仮説をたてたりして検証していく、そういう中で学んでいくものだと思うのです。実際に柿あるいはスイカに、「なんで甘いんや？」と聞いて「食べて欲しいねん！」というような答えを答えてくれることはありません。そういう意味では、実際にはどうなのか、よくわからないわけです。私が他に思ったことは、糖分が含まれているからという答えは必要ではないのかということ、その答えをその先生は求められていないということでしたが、私はまた別の意味で必要なんじゃないかと思ったこともあります。例えば、なぜ甘いかと聞かれて、糖分が含まれている、といった一般常識のような知識をそのまま説明できるという力について、それもまた必要な能力ではないかということです。要するに、常識であるとか、常識過ぎて説明できないということではなくて、一つの方法として説明できる力、そういうことも必要なんじゃないかと考えています。それは、高校までに皆さんが習ってきた、答えのある勉強です。そういったことを更に一般知識、常識として、勉強に活かすという意味での学び方のひとつとして重要なのではないかと思います。それと合わせて、この学びの意

味に加えて、先ほどのスイカはなぜ甘いのかという問いについて食べてもらいたがっているからだという答えもあったように、さらにそこに探究すべき問いとその答えがあるのではないかということです。そういった意味で、一つの問いかけ、あるいは一つの答えといったものを自分で見つけていくことに、学生として学ぶ意味があるものと思っています。

さらにもっといえば、大学の勉強というものは私たち教員が答えを与えていくものではなく、むしろ皆さんに問題を与えていくことが役割ではないかと考えています。なぜそういった話をするかということ、常識では説明しきれないような事象も世の中には存在するのではないかと、ということも考えるわけです。それはある意味で、科学の力では解明できないような部分を、宗教であったり神であったり、そういう形で説明される部分があるのではないかということのも私の一つの考え方です。結構強引に「敬神愛人」に近づけていっているように感じられているかもしれませんが、私が伝えたいことは、皆さんが大学で、自分で学び、自分で答えるということ、そのために何が必要かということです。まず、皆さん自身が経験していく、そういうことによって学ぶことが出来るのではないかと考えております。

ですから、敬神「神を敬う」愛人「人を愛する」を皆さんが思いっきり学ぶ、そういう経験を通じて初めてひ

とつひとつ実感することで、それぞれの段階において自分が理解できる答えを出してゆくことができれば、後にそれが誤っていた、間違っていたということがわかって、それが自分の成長に繋がるものだと思うことが出来ると思います。

あと少し付け加えると、思いっきり本を読んでください、ということです。その理由は、自分が経験していないことを、自分の経験したことのように学べるからです。この能力は人間以外の動物にはないものであると聞いております。その説明としてよく言われるのが、歴史の教科書です。歴史はどこから始まっているのかといいますと、先史時代と書かれています。先史時代というのは歴史の前、先ということですが、では歴史がどこから始まっているの、と思われるかもしれません。どこから始まったかということ、いわゆる「文字」の発明以降であるとよくいわれています。そのように文字、文献で伝えていくこと、文献を読み取っていくことによって先人の知恵を学び、自分で経験し、そのようにして自分の枠を広げていく、それが大学生として求められているものではないかと思えます。

さらにそれが大学2年生ぐらになりますと、今度は専門演習、ゼミというものを選ぶ機会が出てきます。私は自身の学生時代に会計学を専攻するゼミを選んだのですが、友人とともにゼミ説明会を聴き回って、賢

易のゼミに行った時に、その先生が次のようなことを言われていました。「芥川龍之介は人生を構成する要素として、次の4つをあげました。まず一つ目は素質。これは生まれもったもので、変えることはできない。二つ目は環境。環境によって素質が大きな影響を受けることがある。三つ目は偶然。この何かたまたまうまくいったとか、あるいはうまくいかなかったとか、そういったことで人生は大きな影響を受けることがある。四つ目、それは意思であると。自分の意思であると。」皆さんもこの名古屋学院大学に入学されたわけですが、ここにいるのは決して偶然ではなくて、最終的には皆さんが選択し決断された結果によって、自分の意思によって入学されてきたものであるはずです。

一般に、自分で決断したものや自分で努力して得たものが多いように見える人は、謙虚な姿勢を持たれていることが多いように思います。何か結果を出せたとき、自分の意思で選んだ、自分だけでやってきたと、ついついそう思いがちですが、逆にそうやって自分で努力した人は謙虚です。

例えばたまたま、先日テレビで観たのですが、サッカー選手のベッカムが、中国に行って歓迎されていました。そこでお腹を見せたりしていたのですが、お腹に中国語で刺青が

彫ってありました。その刺青で何が書かれていたかということ、「生死、生きる、死ぬというのは運命が決める。富や名声は神が決める」ということでした。要するに、あれだけの地位や名声を得ている人でも、全部自分の力だけで得られたとは言っていないのです。しかし、それが富や名声を得ている人の素直な実感なのだろうと思います。

皆さん、将来、何になりたいですか。有名になりたいとか、お金持ちになりたいとか、銀行員になりたいとか、商社マンになりたいとか、あるいは自営業の親の家業を継ぎたいとか、そういうふうにいるいろいろな方向性があると思います。でもなかなか、自分一人では決められないことでしょう。自分一人ではうまくゆかないことも多いのですが、しかし自分の意思がないと、努力がないと、やっぱり目標を遂げることができないのです。自分がこの世に、この場にいることに、今までの環境に感謝することが必要になってくると思います。神に感謝し、人に感謝する、そういう感謝が最近では忘れられているような気がします。ですから忘れないためにもぜひ、「敬神愛人」という言葉をことあるごとに思い出してください。自分の意思に誇りをもって、さらなる努力をして、充実した学生生活を送られることを期待しております。

(うえだ ゆきのり 商学部准教授 2013.4.11 カレッジアワー奨励)

イエスの愛の教え

高見伊三男

彼らの議論を聞いていた一人の律法学者が進み出、イエスが立派にお答えになったのを見て、尋ねた。「あらゆる掟のうちで、どれが第一でしょうか。」イエスはお答えになった。「第一の掟は、これである。『イスラエルよ、聞け、わたしたちの神である主は、唯一の主である。心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。』第二の掟は、これである。『隣人を自分のように愛しなさい。』この二つにまさる掟はほかにない。」律法学者はイエスに言った。「先生、おっしゃるとおりです。『神は唯一である。ほかに神はない』とおっしゃったのは、本当です。そして、『心を尽くし、知恵を尽くし、力を尽くして神を愛し、また隣人を自分のように愛する』ということは、どんな焼き尽くす献げ物やいけにえよりも優れています。」イエスは律法学者が適切な答えをしたのを見て、「あなたは、神の国から遠くない」と言われた。もはや、あえて質問する者はなかった。

(新約聖書 マルコによる福音書12章28～34節)

本日は名古屋学院大学の創立49周年の記念日でございます。来年は創立50周年の記念の年となり、様々な記念行事が計画されております。本学のますますの発展を願うと同時に、本学の根本的精神、すなわち、本学の建学の精神を基本として発展してゆくことが重要なことであると思われまます。

その建学の精神であります「敬神愛人」は、創立者のフレデリック・

チャールズ・クライン博士によって唱えられました。この「敬神愛人」は聖書の言葉に基づいております。「敬神愛人」についての聖書の記事が、3つの福音書にありそれぞれに特徴がございます。今回はまず最も古いA.D.70年くらいに成立したと推定されておりますマルコによる福音書から、特にイエスの愛の教えについて学んでまいりたいと思います。

先ほど朗読していただきました、

マルコによる福音書12章28から34節の初めの見出しに、“最も重要な掟”とございます。聖書の中で最も重要な愛の教えがイエスによって要約されているのでございます。

まず28節ですが、「彼らの議論を聞いていた一人の律法学者が進み出、イエスが立派にお答えになったのを見て、尋ねた。『あらゆる掟の中でどれが第一でしょうか。』」と書かれています。ここで律法学者とはユダヤ教の律法学者のことです。彼らは律法、すなわち旧約聖書特に最初のモーセ五書を基礎としてその時代に生きる人々の社会への適応を解釈していました。彼らは成文律法のみならず、口伝律法、口伝えの律法をも重んじていきましたので、次第に律法全体が拡大していきました。それと同時にその律法全体の要約についての問いも重要性を帯びていきました。私たちの大学の規則を始めとしまして、社会のあらゆる規則がいつのまにか拡大するにともないまして、同時にそれらの要約も求められてくることがあります、それと同じような状況があったのではないかと思います。

次に29節から30節ですが、イエスはお答えになった。「第一の掟は、これである。『イスラエルよ、聞け、わたしたちの神である主は、唯一の主である。心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。』」とございます。30節の「心を尽くし、精神

を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。」というのは具体的には旧約聖書の申命記6章4から5節からの引用ですが、全人格を尽くして神へ礼拝や祈りなどを捧げることを意味します。また31節ですが「第二の掟は、これである。『隣人を自分のように愛しなさい。』この二つにまさる掟はほかにない。」とありますが、イエスによる第二の掟は旧約聖書のレビ記19章18節からの引用でございます。これは自己愛も含まれておりますが、明らかに隣人愛が強調されております。

次に32節から33節ですが、「律法学者はイエスに言った。『先生、おっしゃるとおりです。「神は唯一である。ほかに神はない」とおっしゃったのは、本当です。そして、「心を尽くし、知恵を尽くし、力を尽くして神を愛し、また隣人を自分のように愛する」ということは、どんな焼き尽くす献げ物やいけにえよりも優れていまして。』」とあります。

さらに34節ですが、「イエスは律法学者が適切な答えをしたのを見て、『あなたは、神の国から遠くない』と言われた。もはや、あえて質問する者はなかった。」とあります。

ここでイエスの言葉の「神の国から遠くはない」というのは神の国に近いが、神の国にはまだ完全に入っていないという意味が含まれていると考えられます。

さて、イエスの愛は二つの愛の掟

に要約されましたが、その二つの愛の掟はイエスによってさらに成就、貫徹、徹底されていきます。すなわち、イエスは上記の旧約聖書の二つの引用文における愛をさらに積極的に成就貫徹されて行かれました。

まず第一の掟、すなわち神への愛は、父なるあるいは父である神への愛に貫徹されました。イエスは神様にむかって、天地の全てのものの主なる創造者支配者完成者であるところの神様にむかって当時の口語（話し言葉）のアラム語の「アッパ」によって呼びかけられました。この「アッパ」という言葉はこどもが最初に覚える父親への呼びかけの言葉でありまして、大人になってからでも父親への呼びかけの言葉として使われたと言われております。日本語で言い換えますと、「お父ちゃん」や「お父さん」の意味になりましょうか。とにかく「敬愛の念」すなわち尊敬と親愛がこもった呼びかけでございます。そしてその父なる神と子なるイエスは、他のどんな関係よりもお互いに最も親しい関係にあったということがマタイによる福音書11章27節他に述べられております。そうした最も親しい関係の一例としまして、マタイによる福音書5章43から48節を朗読いたします。

「あなたがたも聞いているとおり、『隣人を愛し、敵を憎め』と命じられている。しかし、わたしは言うておく。敵を愛し、自分を迫害する者のた

めに祈りなさい。あなたがたの天の父の子となるためである。父は悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださるからである。自分を愛してくれる人を愛したところで、あなたがたにどんな報いがあるか。徴税人でも、同じことをしているではないか。自分の兄弟にだけ挨拶したところで、どんな優れたことをしたことになろうか。異邦人でさえ、同じことをしているではないか。だから、あなたがたの天の父が完全であられるように、あなたがたも完全な者となりなさい。」

この最後の節はルカによる福音書6章35節から36節では「いと高き方は、恩を知らない者にも悪人にも、情け深いからである。あなたがたの父が憐れみ深いように、あなたがたも憐れみ深い者となりなさい。」とあります。ここにイエスの父なる神、すなわち大いなる憐れみ深い父なる神への敬愛の念がいかに深かったかがうかがえるのではないかと思います。

第二の掟、すなわち隣人愛につきましてはイエスが引用されました旧約聖書のレビ記19章18節では、実はその隣人愛は同胞のイスラエル人に限られておりました。イエスはそうした隣人愛をさらに“善いサマリア人”などのたとえなどによって示されましたように、たまたま出会った敵対関係の困窮者にも及ぶように示

されました。この“善いサマリア人”のたとえばゴッホやレンブラントといった著名画家によっても描かれております。そのたとえば示されておりますルカによる福音書10章25から37節を朗読いたします。

すると、ある律法の専門家が立ち上がり、イエスを試そうとして言った。「先生、何をしたら、永遠の命を受け継ぐことができるでしょうか。」イエスが、「律法には何と書いてあるか。あなたはそれをどう読んでいるか」と言われると、彼は答えた。『心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい、また、隣人を自分のように愛しなさい』とあります。」イエスは言われた。「正しい答えだ。それを実行しなさい。そうすれば命が得られる。」しかし、彼は自分を正当化しようとして、「では、わたしの隣人とはだれですか」と言った。イエスはお答えになった。「ある人がエルサレムからエリコへ下って行く途中、追いはぎに襲われた。追いはぎはその人の服をはぎ取り、殴りつけ、半殺しにしたまま立ち去った。ある祭司がたまたまその道を下って来たが、その人を見ると、道の向こう側を歩いて行った。同じように、レビ人もその場所にやって来たが、その人を見ると、道の向こう側を歩いて行った。ところが、旅をしていたあるサマリア人は、そばに来ると、その人を見て憐れに思い、近寄って傷に油とぶ

どう酒を注ぎ、包帯をして、自分のろばに乗せ、宿屋に連れて行って介抱した。そして、翌日になると、デナリオン銀貨二枚を取り出し、宿屋の主人に渡して言った。『この人を介抱してください。費用がもっとかかったら、帰りがけに払います。』さて、あなたはこの三人の中で、だれが追いはぎに襲われた人の隣人になったと思うか。」律法の専門家は言った。「その人を助けた人です。」そこで、イエスは言われた。「行って、あなたも同じようにしなさい。」

この“善いサマリア人”のたとえの中にも、神を愛しなさい、それから、隣人を愛しなさいという言葉が律法学者によって答えられております。さらに律法学者は私の隣人とは誰ですかと問いかけております。そこでイエスが“善いサマリア人”のたとえを示されました。この善いサマリア人のように異邦人、当時はサマリア人とユダヤ人は特に敵対関係にありましたが、そういう敵対関係の異邦人にも及ぶ憐れみ深い積極的な愛の教えは前代後代未聞の教えであります。

そうした二つの愛の掟をイエスは、さらにその全生涯を通して、例えば、父なる神への絶えざる祈り、様々な病人への驚くべき癒しの業、立場的に低くくみなされていた人々との親交、そして愛の極みとしての十字架、その報いとしての復活、昇天、父なる神の右への着座、そこでの執り

成し等を通して成就貫徹して行かれたということが聖書において様々に証言されております。

要するにイエスの愛は、積極的な他者敬愛的愛、他者中心的愛、他者奉仕的愛、憐れみ深い愛、自己贈与的愛、自己卑下的愛そして永遠なる愛ということでございます。上述のような神の最愛の子、救い主イエス・キリストによって積極的に成就貫徹されました二つの愛が、私たちのあらゆる宗教的人間的関係における根本土台となるようにイエスによって招かれ導かれております。イエスのそうした永遠の愛によって、私たちにおける深い罪、すなわち原罪と言われております自己中心性、利己主義

から私たちが日々開放されていくことを願ってまいりたいと思います。

結論といたしまして、イエスによって教えられ、要約され、さらに貫徹されていかれました愛は「敬神愛人」ということでございます。これをさらに要約いたしますと、積極的な他者敬愛的愛、他者中心的愛、他者奉仕的愛、憐れみ深い愛、自己贈与的愛、自己卑下的愛そして永遠なる愛でございます。こうしたイエスによる「敬神愛人」を本学の建学の精神、すなわち精神的土台として私たちが共にますます固く踏まえまして、本学の今後のますますの発展へと共に前進して参りたいと願わずにはおられません。

(たかみ いさお スポーツ健康学部教授、宗教部長 2013.10.15 創立記念日礼拝奨励)

